治乱興亡、そして天下は光風霽月也。

御坂星蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
治乱興亡、そして天下は光風霽月也。

【Ｎコード】
Ｎ２４７８Ｈ

【作者名】
御坂星蓮

【あらすじ】
様々な理由から将軍となった六人の民。統率の仕方は十人十色。最後に天を掴むのは、誰だ。もし、あなたが将軍となったら如何にして天下を治めますか？

序：乱世再来、結束の分裂。（前書き）

別伝も書いていきたい、ということで勝手ながら短篇を削除いたしました。迷惑をお掛けしました。
連載として書いていきます。

序：乱世再来、結束の分裂。

小規模な戦すら起こらないこの寂れた小さな国には、玉座に憧れる六人の民があった。
民といっても多少の権利はある位置に置かれている立場の民で、武もそこそこ備わっているのだ。
戦には義勇軍として参陣した事が何度となくあった。
そうやって、勝利を治めたりもしていた。
この乱世、女子供も腰に剣を差す事を許可されており、男女逆転として国を統率していく事も在り得ない話では無かった。

北の地に、赤髪の民あり。
姓を『刀』、名を『武』といった。
敵軍勢力へ単騎で駆け、怪我ひとつせず功を立てる豪傑だ。
この地で生まれ、この地で育ってきた。
刀武は、字を『岱夷』と定めた。
泰平の向こう側から、少しずつ乱世が近づいていた。

東の地に、碧眼の民あり。
姓を『詠』、名を『或』といった。
冷静沈着な態度で戦に挑み、味方をした軍が優勢になれる策を打ち出す。
この地で生まれ、この地で育ってきた。
詠或は、字を『忠葎』と定めた。
泰平の向こう側から、少しずつ乱世が近づいていた。

南の地に、黄金の首飾りを身に付けた民あり。

姓を『斉』、名を『誄』といった。
華麗な舞踊で味方に幸福をもたらし、敵軍を翻弄する。
この地で生まれ、この地で育ってきた。
縁談は無く、皇后や夫人と呼ばれることもまだなかった。
泰平の向こう側から、少しずつ乱世が近づいていた。

西の地に、緑色の鎧を纏った民あり。
姓を『織』、名を『嘉』といった。
持ち前の器量と才能で、他の民たちからも大いに慕われている。
この地に生まれ、この地で育ってきた。
織嘉は、字を『狗楓』と定めた。
泰平の向こう側から、少しずつ乱世が近づいていた。

北東の地に、黒き気迫と怨念を漂わせる民あり。
姓を『抵』、名を『桧』といった。
彼女の得意とする奇襲戦法は、闇でさえ見抜く事が出来ないと噂されていた。
この地に生まれ、この地で育ってきた。
抵桧は、字が欲しいと切実に願った。
一人の女ではなく、男として国を守りたかったのだ。
泰平の向こう側から、少しずつ乱世が近づいていた。

そして南西の地に、白き心を抱く民あり。
姓を『郭』、名を『升』といった。
大切な仲間たちを守る為、命をかけて戦い抜き戦功を立てた。
この地に生まれ、この地で育ってきた。
郭升は、字を『雛覇』と定めた。
泰平の向こう側から、少しずつ。
確実に乱世が近づいていた。

この大陸は、束の間の泰平に包まれていた。
分裂しては、戦が起こる。
勝者が居て、敗者が居る。
国はひとつとなる。

また国同士が分裂し、戦乱の時代がやってくる。
そして勝者が居て、敗者が居る。
国が、ひとつとなる。

やがて、ひとつの国が分裂するという歴史が時を紡ぐ。

――また、再来する。

そして天下は、乱世となった。

これまで共に助け合い、国を築いてきた六人の民は。
将軍となった。
初めは状況を飲み込める状態ではなかった。
帝(みかど)へ訊(たず)ねても追い返されるだけだった。
仲間だった者たちを、倒して天下を取る。
誰でもいい。
誰かが誰かを、討(う)つ。

そうすれば天下は、丸く掌中(しょうちゅう)に治まる。
掌中に、治めなければならないのだ。

第一話：仲間を殺して、天下を取るのか。

南西の郭升は、戦に向けての策を練っていた。
郭升の軍勢は二千にも満たない小さな勢力であり、この地へ攻め込まれたとしたなら
勝利の風が吹くことは無いだろう。
郭升の背後に吹いているのは、臆病風ばかりだ。
不安は募(つの)り、策どころでは無くなっていた。

城内にて、こちらへと向かってくる足音が聞こえた。
その足音は数秒聞こえただけで、扉が開いた。
「御免仕(つかまつ)ります郭升殿。東の地より、詠或殿が殿に会いたいとお見えになっておりますが」
「詠或か、よし連れて参れ」
短い会話を済ませ、家臣は軽く礼をし部屋を出て行った。
それと共に、懐かしい幼馴染(おさなじみ)が堂々たる面持(おもも)ちで入ってきた。
詠或と云(い)う男は身の丈(たけ)六尺。
外見のみでも威厳が伝わってくるような風貌(ふうぼう)であった。
「雛覇…いや、今は敵同士だ。字で呼ぶのは控えよう。郭升、久しいものだ」
詠或が軽快に手を上げた。
「あぁ、本当だな」
詠或は敵同士と言いつつも、殺意は感じられなかった。
郭升は、詠或に対して親しみが残っており全ての想いを打ち払う事は出来なかった。
どちらも同じ心持ちであった。
「そうだ…なあ詠或。俺は将軍に向いていない様な気がする」
郭升は詠或から視線を逸らし俯(うつむ)いた。
「何故(なにゆえ)、そう感じるのだ？」

詠或が、腕を組んだ。
「二千の兵すら巧く引導してやれず、敵国に怯えてばかり、お前のように策を考えることさえ出来ない」
「…そして、敵国の女子に惚れているなど単なる煩悩でしか無いだろう？」
目を細めて微笑した詠或は、浅い溜息を吐いた。
「最初からそこまで立派な人間でなくても良いではないか」
「郭升は心が人一倍純粋で優れているのだ、人など誰もが殺したくは無いだろう」
「それと、敵国の女子とは抵桧の事か？」
「違う」
鮮明な即答だった。
「となると斉誄か」
「…違う」
明らかに郭升の頬は紅潮していた。
「そうか、違うのか」
態とらしくそう言うと、郭升の髪を軽く掴み顔を上げさせた。
「そうだ…そうだ！詠或。何の為にここまで来たのだ？道中大変だっただろう？」
郭升は慌てて話を逸らした。
「ああ、つい楽しくてな。重要な事を忘れていた」
『楽しくて』
その言葉が郭升の胸を痛めつけた。今は敵同士なのだ。
一瞬で詠或の表情は真剣になった。
「郭升。お前は私を殺す事が出来るか？」
「もし私を殺して天下を取ることが出来るならば、お前は私を殺してまで天下を取りたいと思うか？」
郭升は目を見開くと共に、自分自身が詠或を殺す場面を想像し、背中に激しい戦慄が走った。

―だが殺さずして、天下が取れるのか？―

郭升は己(おのれ)の中の優しさを、無理矢理握り潰した。

心の底から深呼吸をする。

「俺は…？」

「俺は！天下を取って平和がまた戻ってくれるなら…お前一人の命など、惜しくは」

「惜しくは……」

座っていた椅子(いす)から立ち上がり、机上へ両手を叩きつけた。

「駄目だ…！俺には殺せない…」

「そんな天下なら他の者にくれてやる…！」

詠或が郭升の手を、強い力で握った。

「一瞬私は焦(あせ)ったが、予想通りだな」

「郭升率いる部隊はおよそ二千。失礼だが放浪将軍並みだろう」

「私はこれでも三万の兵を率いているのだ、今後新たに兵を一万程加えようと計画を立てている」

「私と長期同盟を組み、共に覇道(はどう)を歩まないか？」

郭升は破顔一笑(はがんいっしょう)した。

彼は二つ返事で承諾し、詠或を迎えた。

二人は、互いにしっかり手を握り合っていた。

こうして郭升と詠或率いる兵は、四万二千という大勢力にまで上(のぼ)った。

「郭升。…いや、雛覇。もう味方なのだからな、お前もまた字で呼んでくれ」

「そうだな。……忠葎。お前のおかげで小国から大国へと変貌を遂げる事が出来た」

この様に大きな勢力へと成長した事よりも、また昔の様に字で互いを呼び合えることが郭升にとって何よりも。

嬉しかった。
二人のもとへ誰一人欠けることなく結集した四万二千の兵たちには、何不自由無いようにさせた。
食事は三食、食べたいだけ食べさせた。
調練(ちょうれん)も、無理のないようにさせた。兵が疲れたら休ませた。
将軍の二人居る、心がひとつの国は大いに繁栄(はんえい)していた。
「雛覇、国は今とても豊かだろう。だが、豊かなだけでは天下も何も狙えないだろう。どこかの国を攻めよう、辛いかもしれないがこれは
必然だ」
郭升の表情が険しくなった。
「待ってくれ。俺たちは仲間だ。俺がお前を従えたのでは無く、お前が俺を従えた訳でもない。和解しあって仲間になったのではないか。
他の者だって話せばきっと分かってくれるだろう、攻める戦と云うのには反対だ」
「戦わずして勝つ…。それが雛覇、お前の主張か？」
「それともその策で勝てる相手が居るのか？」
勝てそうな相手など考えもしていなかったが、ふと敵国の将軍の顔が郭升の頭の中に浮かんだ。

斉誄。

「あいつなら俺たちに協力してくれるはずだ」
自然に声に出ていた。
「あいつとは、誰か心当たりがあるのか」
詠或が問いかけた瞬間、扉が勢いよく開かれ二人は同時に振り返った。
「伝令でございます！南の地より斉誄将軍、こちらへ向かい進攻している模様でございます」

凍りついた。
「その数、大将直属含み一万程です」
「斉誄が…？何故俺らの所へ攻めてくるんだ…」
郭升は床に膝を付き、肩を落とし崩れ落ちた。
「さあ、ただちに防衛の準備をせよ。兵は二万だ」
詠或が指示を出し、伝令が出て行こうとしたその時。
「待て！兵など用意せずとも良い！敵の兵を進軍停止させ、一騎討ちをしたい」
「頼む…たとえ敵の兵であろうとも、無論俺たちの兵も、多くの兵を傷つけることはしたくないのだ」
詠或は郭升を直視した。
「無」

『無謀なことをぬかすな、万が一敗れてしまったら和解などでは済まないのだ』

そう言おうとして詠或は言葉を呑み込んだ。
『敵国の女子に惚れている』
郭升のその言葉が脳内を過ぎった。
惚れている者の配下たちを傷つけ悲しませることは出来ないと心からそう感じたのだろう。
詠或は郭升の良策『想い』を優先した。
「すまない、訂正だ。兵は要さず、雛覇と斉誄の一騎討ちにしよう」
穏やかな表情をした詠或は、伝令を持ち場へと帰した。
「ありがとう」
そう言うと郭升は静かに立ち上がり、詠或に背を向けた。
「雛覇。鎧を忘れている」
振り返った郭升は、首を横に振った。
「いや…鎧は必要ない…が、武器は一応護身用として持っていこう」
そう言うと鉄槍と木製の棒が置いてあった場を見つめ、棒を手にす

ると詠或に向かって手を振り城を出て行った。
『あいつは…負ける気なのか？それとも戦わずに勝つ気なのか』
そんな疑問を胸中に躍(おど)らせた詠或は、城の守りに付くことにした。

第二話：戦わずして勝つ、無謀な策略。

郭升の感じた風は、強かった。
やがて一万の兵を率いた斉誄の姿が見えてきた。
斉誄もこちらが見えたのだろうか、後方の兵を止め、戻るよう指示し単騎でこちらへ駆けて来た。
鎧すら纏わず、武器も棒しか携えていない郭升を見て、馬から降りた斉誄は驚いた様子だった。
「久しいものだな、斉誄。一万の兵は全てお前が率いている兵たちなのか？」
「そう、全員誄の仲間。本当に久しぶり」
軽い挨拶の直後、斉誄は郭升に向かい唐突にこんな質問をぶつけてきた。
「ねえ。雛覇は誄と戦う気が無いのかな？それともわざわざ負けに来たの？それって誄が女で力も無いから気を使ってるって思っていいの？」
郭升は息を呑んだ。
「すまない。確かに俺は、斉誄と戦う気は一切無い。だが、それはお前が女だからではない」
「じゃあ何なの」
躊躇(ためら)った。
この様な状況下で『好きだから』等とほざけたものではない。
郭升は、開口する決意をした。
「俺は今、忠葎と仲間なんだ」
「そんなの知ってる」
「だから…俺と…俺の、俺たちの仲間になってくれないか？」

沈黙が訪れた。
時間だけが静かに過ぎてゆく。
郭升は、斉誄の答えを待った。
「雛覇。誄は、雛覇たちの仲間になりたいよ。なりたい。だけど…無理」
「せっかく沢山の仲間たちを連れてきたんだよ、天下を取るって心に決めちゃったもん。それからこの間、岱夷と会ったんだ。それでね、
もしも誄が仲間になろうって訊いたらどうする？って訊いてみたんだ。そしたらね、岱夷は絶対協力してくれるって」
「…誄は無理だよ。立場を捨ててまでそんなの。殺された方が全然いいよ」
この一言には流石（さすが）に衝撃を受けた。
ひとりの少女が、『殺された方がいい』などと言ったのだ。
「頼む、俺たちと共に戦ってくれ…それでも天下は十分狙えるだろ？」
本気で頭を下げた郭升は、眼球のみで斉誄を見ていた。
「雛覇は昔から『頼む』っていうのばっかりだよ？誄にだって事情はあるの、全部自分の思い通りになると思わないでよ」
斉誄が涙を流した。動揺を隠せない。
『事情』という単語が何か心に引っ掛かるものがあった。
「事情？事情って何だよ…何かあるなら話してくれても良いじゃないか」
「だって敵同士じゃない、誄が不利になっちゃうよ」
仲間だと思ってくれない斉誄に、悲しみさえ感じた。
「俺はお前を攻撃しない、絶対だ。約束する。本当に嫌なら、その腰に据えた短剣で俺を殺すがいい」
「俺は信じてる、斉誄のこと。だから、お前も信じてくれ。頼む！」
斉誄が返答をしようとしたその時、遠くから黒き旗を掲げた百程の騎馬兵がこちらへ向かってくるのが見えた。

まるで揃っていない足音が響く。
斉誄が旗の方へ振り返った。
「抵桧様だ…！どうしよう、殺される！」
慌てふためいた斉誄は、郭升の背に隠れた。
抵桧の眼(め)には、殺気すら感じられる。
その殺気は、明らかに斉誄のほうを見ていた。
「斉誄…？お前は抵桧に仕えて」
「それ以上言わないで！だって脅されたんだもん、無理矢理だったんだもん！」

「死にたくなかったんだよ！」

第三話：少女の事情、そして本音なるもの。

これが斉誄の事情、そして本音か。
郭升は抵桧が嫌いなのだ。ためらいも無く気に入らない人々を平然と斬り殺してしまうという人道から外れている、そのようなところが嫌いなのだ。
優しく純粋な心の持ち主の斉誄を破壊するつもりだろうか、郭升はそう感じた。
斉誄自身は、涕涙(ているい)するほど郭升」と同盟を結びたいと望んでいる。
無論、郭升もそれを望んでいる。
「斉誄。私を裏切るおつもりですか？私は、貴女(あなた)に忠誠を誓われたはずなのですが」
「裏切ったらその喉元を私の奸剣(かんけん)で貫くと」
郭升は斉誄を庇(かば)う様な動作をし、一歩後ずさりをした。
「脅迫したのか？」
「脅迫…？まあ、そうなりますか。天下を取るためですもの、手段は選びませんよ」
抵桧の浮かべた微笑は、気味の悪いものだった。
「そのような男は無視するのですよ、斉誄。早急に一万の兵を連れ戻しこの地を攻めましょう」
「ふざけるな！本音を打ち明けろ斉誄！お前にだって権利はある！」
「こんな男の首級(しゅきゅう)を討ち取るなど斉誄には容易(たやす)い筈では無いでしょうか？」
「俺たちと戦うほうがお前は幸せなんだ、苦しむ者たちを助け出せる！」
抵桧と郭升両者の叫ぶような声は、とてもうるさく斉誄の脳内に反響した。
「二人とも止めて！誄の答え、聞いて」

斉誄のその声で場は静まり返っていた。
「誄は、抵桧様と一緒には戦いたくない。いつも自分ばっかりを棚に上げて他の人たちを苦しめてるだけに見えるよ。抵桧様は雛覇なんか
よりずっと強いし、忠葎よりずっと頭の回転も速い。誄だって有利になれるよ、抵桧様と一緒に居れば」
「だけど、沢山の人たちを犠牲にしてまで天下なんか取りたくないよ…」
「だから誄は抵桧様との同盟を手切(てぎり)ます」

「それで、雛覇や忠葎と戦いたい」

それが斉誄の、誠の答えだった。
斉誄から告げられた言葉が本当だったと自覚し立腹したのだろうか、抵桧は奸剣を鞘(さや)から抜いた。
同時に斉誄も、短剣を抜こうと郭升の前へ出た。

鎧も身に纏わず武器も棒しか所持していない郭升にとって、この場に存在している事が恥のように思えてきた。
だがそれは、自業自得。仕方の無いことだった。
斉誄が構えようとした瞬間、斉誄は地に腰を落とした。
「ごめん…ごめんなさい。抵桧様…ううん、抵桧。裏切ってごめんね」
「情けないね、郭升たちにも、抵桧にも」
「昔みたいに平和なときに戻りたいなあ…！」

「お願い、首を落としてください」

斉誄はそう願った。
抵桧の奸剣は一刻を待つことなく、戸惑い無く振り下ろされた。

斬った。
抵桧の奸剣が、斬った。
風を斬っていた。

「次にお会いするときは、本当に敵でしょうね」
そう言った抵桧もまた、涙を流していた。
抵桧は夕日で赤く染まった馬に跨(またが)り、遠く去っていった。
郭升と斉誄は詠或の佇(たたず)む城へ、無言で戻った。
その時斉誄が郭升を気遣い小さな声で「ごめんね、ありがとう」と言い少し笑ったのが見えた。
この時郭升の心が揺らぐことは無かった。自分自身の無力さと申し訳の無さ故(ゆえ)に、小さき恋心は完全に消え失せていた。と言うより、無意識に自ら想いを断ち切っていたのだった。

「忠葎。一人の兵をも傷つけず、さらに斉誄を我が軍へと迎え入れられた」
斉誄の背中を、郭升は軽く押してやった。
総兵力は、五万二千となった。
斉誄が我が軍へ加わってからの事、姫武者(ひめむしゃ)は舞踊や華麗な剣術を覚え、士気も上昇し精兵(せいへい)となった。

第四話：対照的な二人と、対照的な能力。

その頃西の地を統率している織嘉と、北の地を統率していた刀武は、短期間に及ぶ同盟を結んでいた。
同盟のはっきりとした目的は定かではなかったが、同盟を組んだのなら何処(どこ)かの国を攻めに行こうとの決断を二人の将軍はした。
侵攻する国は、軍議(ぐんぎ)にて決定。

その国と云うのは、抵桧の治める北東の地だった。
軍団の中で異議のある者は、誰一人として居なかった。

「岱夷殿。奇襲攻撃を仕掛けてはみませんか？」
織嘉は、知(ち)で戦を動かしていたかった。
「奇襲？俺は漏れは面倒なことは嫌なんだ、真(ま)っ直(す)ぐ敵と向かいてえんだ」
対する刀武は、武(ぶ)で戦を動かしていたかった。
二人の性格は対照的で、今までに意見が噛み合った事は一度たりとも無かった。
だが二人にはひとつだけ共通点があるのだ。
二人とも、郭升に憧れていた。
仲間になりたかった。
だが自身の将軍と云う最高の位(くらい)を譲る、捨てるということは自分の心が認めようとしなかった。
郭升たちと、一度(やいば)刃を交(まじ)えてみたかったのだ。

――――――――。
突然、織嘉が辺りを見回した。
「…？今、物音がしませんでしたか？いや、人が歩くような…」
「俺は聞こえなかったけど」

「そうですか？ちょっと城外を見てきますね、しばし暇を頂きます」
そう言うと織嘉は、小走りで城外へ出て行った。
織嘉は、すぐに戻ってきた。その表情は青ざめていた。
「どうした？」
織嘉の手足が震えている。
「北東の地より抵桧軍一万の精兵が、我が軍の城を包囲しています！」
織嘉のよく通った声が響き渡り、城内は一気に静まり。そして城内に居た全員が驚愕した。
「奇襲かよ…抵桧も面倒なことするな」
「全軍、早急に戦の準備をするんだ！あんな軍さっさと片付けてやろうぜ！兵糧は無駄に使うなよ。万が一籠城
《ろうじょう》するときの為にとっておけ！」
「ちょっと待ってください岱夷殿！兵糧の消費を少なくだなんて無謀ですよ、兵士たちを何だと思っているのですか！？きちんと弁
《わきま》えて下さい！」
織嘉は半ば立腹した。
「うるせえ！今回は俺のやり方で戦を動かさせて貰うからな、お前は口出しするな！軍師気取りの出来損ないが！頭を下げたり態度を弁え
りゃ良いって問題じゃねえだろうがよ！」
刀武が乱暴に吐き捨てると同時に、織嘉の怒りは頂点に達していた。憤怒を表したい気持ちを抑える。今は国を守るほうが大事だ。
この様なところで仲間割れを完全にしてしまったのでは全てが無駄になってしまう。
今は何も言わず、織嘉はただ刀武を見据えた。
織嘉は、機の熟す時を静かに待っていた。
奇襲の件は刀武に全てを委ね、籠城することにした。

―一刻、二刻、三刻、四刻、五刻、六刻―
城に立て籠もってからかなりの時間が過ぎていった。
戦へ参陣するわけでもない、新たな策を生み出し指令を出すわけでもない。
ただ、戦の様子を静かに眺めていた。
「確かに岱夷殿は、武で戦を動かすのは誰より巧(うま)いかもしれません。ですが私は岱夷殿のやり方が気に入らない…」
独り言を呟いていた。
城外で鳴り響く銅鑼(どら)の音が、織嘉の耳の中で消えていった。

第五話：踏み出した一歩、人という犠牲の上に立つ。

さて話は変わり、こちらは郭升、詠或、斉誄――――。
「雛覇。抵桧の治める北東の地へ侵攻しよう。守ってばかりで天下は狙えぬ。時には攻めるのも必要だ」
軍議の最中（さなか）、詠或が机上へ手を軽く叩き付ける。
「そうだよ。誄も色々あって迷惑掛けちゃったし『かた』を付けないとね」
以前抵桧に無理矢理同盟を組まされていた斉誄も、侵攻することを薦（すす）めていた。
「ああ。たまには侵攻も良いだろう。それに、出陣の準備は済んでいる。いずれの侵攻は俺も考えていたからな」

「…馬を引け！出陣だ！」

郭升の言った通り、出陣の支度は既に整っていた。

郭升は白馬に跨（またが）り、先頭を進んだ。
詠或の耳に銅鑼の音が、遠く聞こえた。
斉誄は鼻に、血と錆（さび）の匂いを覚えた。
遙か遠くに、戦の様子が見受けられた。

織嘉は、一人立て籠もった城の中に、ひとつの足音を感じた。
「本陣を開け放して前線へ飛び出してしまうとは、岱夷も落ちぶれたものですね」
抵桧の声だった。
本陣には身代わりを立て城を制圧しようとしている抵桧は、織嘉に

気づいていない様子だった。
『抵桧殿の方こそ、落ちぶれているのではありませんか？』
心の中でそう問いかけ、壁に立てかけてあった剣を手に取り、後方（こうほう）より接近した。
そして。
一気に抵桧の首級を飛ばした。

大将首を、討ち取った。
天下に一歩、近づく。

抵桧が討ち取られた事にはまだ誰も気づいていないのだ。
織嘉が剣を捨て、ふと外を見ると遠くに郭升、詠或、斉誄の姿が目に映った。
織嘉は刀武に気付かれぬ様、すぐそこに繋（つな）がれていた軍馬に跨（またが）り三人の所へ向かった。

第六話：己を信ずる心、造反。

「雛覇殿、忠葎殿、斉誄殿。お久し振りです」
織嘉は、抵桧の返り血を全身に浴びていた。
「あちらで戦をしているな、お前は戦わなくて良いのか」
「岱夷殿は、彼自身で戦を動かしたいそうなんです。軍から追い出されるような勢いで罵られてしまいました。…居場所が無いと言うんでしょうかね？」
「ですから、私を迷惑でなければ『配下ではなく同盟勢力として』加えていただけませんか？」
やはり織嘉は、自分自身の位を捨てたくは無かった。
配下ではない同盟勢力としての契りを求めた。
たった一人で造反を起こしたので部隊は無かったが織嘉の志を見込み、快く受け入れた。
「俺たちの仲間になってくれるのは誠にありがたい。だが狗楓。お前は良いのか？岱夷の軍や自分の軍に造反を起こすことになるのだ。岱夷の軍が我が軍に攻め込んでくるかもしれぬ。その様な反乱が起きてまで同盟を組みたいと云う願望があるのか？」
郭升は織嘉がここで同盟の件を断ち切り、戦場へと、戻ると予想していたのだが、その予想は的外れだった。
意外にも織嘉は明るく快活な表情を見せた。
その表情は作っているものではなく、心からの表情だと思った。
「ええ、岱夷殿との同盟は、只今より破棄する事を決心いたしました。私は、抵桧殿から奇襲を受けた際に『軍師気取りの出来損ない』と言われとても傷心しているのですよ、雛覇殿と手を組んでいただければ岱夷殿は孤立してしまうのです」
織嘉は熱く語る。
「孤立？何故孤立するのだ？抵桧の軍がまだ進軍途中であろう」

「ああ、抵桧殿…。はもう居ませんよ。単騎で城内へ進軍してきた所を私が…ごめんなさい。大切な幼馴染なのに私の勝手で」
郭升と詠或と斉誄の三人は、今までに無く驚いた。
だが首を討ち取った織嘉本人が、幼馴染を殺めてしまった事に一番驚いていたのだ。
「とにかく、岱夷殿は孤立した状況次第に攻め入ってきて、兵力差で負ける事でしょう。降伏か死かを選択する筈《はず》。もはや岱夷殿の味方は自分以外に居なくなるのです！どちらかを選べば、もう天下はひとつとなるのです！此処にいらっしゃる皆さんも心の中ではそう望んでいるのでは無いですか！？私には、そう感じます」
織嘉のはっきりとした主張だった。
その通り、三人は織嘉に造反させ刀武を独立勢力になる様にとも思っていた。
「…狗楓。我が城へ戻ろう。岱夷がいつこちらの気配に気付くか分からないからな」
この瞬間、織嘉の怒りや戸惑いは一瞬にして希望と野望へ変化した。

第七話：結果を得たり、辛勝のこと。

戦。それに勝ち、天を掴む。
それが覇道なのだと、最初は誰もがそう考えていた。
だが時が経過するにつれ、考えが変わってきたのだ。

争わずとも、天は掴める。
泰平の世を目指すのでは無い。
泰平の世を創造していくのだ。
そしてそれを、持続していく。

そういった考えへと変わっていった。
造反者となった織嘉は、郭升の隣に歩き一言も話すこと無くただゆっくりと、城へ戻った。
その表情は、喜びに満ち溢れていた。

天下に一歩、近づいた。

刀武の軍勢が辛勝（しんしょう）したと気付いたのは、抵桧が織嘉によって討ち取られてから十刻（じっこく）ほど経った頃だ。
刀武軍伝令のひとりが城内へ戻った際に、生々しく首が転がっているのを見た。
背中にも一つか二つ程剣で斬りつけられたような痕（きずあと）があったが、その太刀筋（たちすじ）は明らかに織嘉のものだった。
その斬り方を以前織嘉直属の配下に伝授していたのを見たことがあ

るが、ここまで完璧に斬れるのは織嘉以外に誰も居ないだろう。
伝令はすぐに刀武のもとへ疾走した。
「伝令でございます！敵軍総大将抵桧、織嘉将軍により首級を討ち取られた模様！城内に屍が残っております故、ご確認の程をお願いいたします！」
刀武は抵桧の残党を眺めた。
敗北したことを誰一人として知らず、ただ勇猛果敢に奮戦していた。
士気が上昇している。
このまま力押しに押せば完全撃破できるような軍勢だったが、ふと刀武の頭の中に織嘉の言葉が過ぎった。
『兵たちを何だと思っているんですか！？きちんと弁えてください！』
と。
刀武は「さらに奮戦せよ」と号令を出す前に思い踏みとどまった。
床に転がり落ちている抵桧の首級の解けた髪を掴み、拾い上げる。
「狗楓が…俺の軍から離反したな」
「面白い！いや……」
刀武はそのまま城外へ出て、大きく息を吸い込んだ。
「全軍、撤退せよ！俺たちの勝利だ！」
残った織嘉の軍と、刀武の全軍は自分たちが負けたものだと思い込んでいた。
それに対して総大将が離反した織嘉によって討ち取られた事を知らない抵桧の軍は、自分たちが勝ったものだと思い込んでいた。

全てが、逆だった。

第八話：奴を取り戻せる可能性は、あるか。

「俺たちの軍は勝った、辛勝だが勝ったことに変わりは無い！狗楓が抵桧の首を討ち取ったんだ！だが…狗楓は軍を残しひとり造反者となった。直属部隊も、全て残してだ」
戦っていた兵士たちは複雑な気持ちに襲われた。
激戦には勝利し、主君には一言も無く見捨てられた。
織嘉の残った軍には、勝利した歓喜（かんき）の気持ちよりも怒濤（どとう）の波紋が流れていた。
「刀武将軍！将軍は悔しくないのですか」
「断りも無く同盟を放棄され、腹が立たないのですか！？」
「出来損ないの軍師気取りとは、正（まさ）にあいつの事よ！」
身をも焦がす程の怒りに震えた戦士たちの声が、困惑する刀武の脳内に広がる。
刀武は、拳（こぶし）を握り締めた。

「言葉を慎（つつし）め。狗楓を馬鹿にしたような口を叩くな」
二つの純粋な瞳に、涙が溢れる。
『散々馬鹿にしてきたのは俺もだ…』
そんな考えもよぎらせ、またも涙が溢れる。
「狗楓には狗楓の考えがあるんだ。それを邪魔する事は出来ないんだ…！俺は狗楓が嫌いなわけじゃない、本当は策にも賛同したかった。
俺は良策だと思った。だけど俺は、策とかよくわかんねえし、一応将軍だしよ…！思うままに戦を動かしたかったのもあったしな…」
兵士に言い聞かせると共に、刀武は自分へも言い聞かせていた。
家臣たちの前で思い切り声を上げて泣き叫んだ。
「あんなこと言っちまったが、本当は。本当は…」

「ずっと仲間で居たかった…！」

批判と罵詈雑言(ばりぞうごん)を浴びせる者は、もうなかった。
赤黒き血にぬれた武器たちは、虚空(こくう)を見つめた。
今や造反者となった織嘉に討ち取られた抵桧の首もまた、虚空を見つめていた。

第九話：友である故に、確信出来るもの。

「岱夷は…敗北を百も承知の上で我等への戦を挑んでいるのか。それとも策があるのか私には予測も出来まい」
刀武は晴らし切れない悲しみを、「戦」という形で晴らそうとしていた。
誰が見ても郭升らの軍が圧倒的に多く、強い。
それは一目瞭然であって、策を駆使しさらに大きな武力も備えていなければ刀武が大勝利を掴める戦ではなかった。
「大丈夫です。あまり余計な心配をしない方が宜しいですよ、忠葎殿。岱夷殿は、確実に降伏します」
堂々たる面持ちで織嘉は述べた。
「そう言い切れる理由は」

「…それは私と岱夷殿が友であるから、ですよ。少し苦手な部分もありますが、やはり同盟を破棄したのには少し後悔しているんです」

「岱夷殿には岱夷殿の持つ考えがあります。いつまでも唯我独尊な世界を描きたいという願望だけでは駄目なのだと、私は感じさせられました」
織嘉の純真無垢な心が、そう感じさせてくれたのだった。
「それでは狗楓。お前は私や雛覇、斉誄と同盟を結んだ事に対しての後悔は無いのか？」
先程の織嘉の言葉を耳にしたのなら当たり前のように誰もが浮かぶ疑問を、詠或は尋ねた。
「後悔は、しません。自分自身、私の考えや思いから決断したものですからね」

「貴方(あなた)たちと同盟を組めたことには」

「この織狗楓(しきこうふう)、とても嬉しく思っています」

織嘉の眼は、雄々《おお》しい光を放っていた。
開戦前に織嘉と詠或の二人が交わした会話は、この位だった。
後(あと)は、北の地より侵攻を目的に進軍する刀武を待つのみだ。
兵士たちは、活気にあふれていた。

刀武が郭升たちの元へ侵攻してくる事に、大幅に時間が掛かった訳でもない。
やはり彼は武(ぶ)で戦を動かしたい者であり、特別な策を練ってはこなかった。
そして、前と同じように本陣を開け放ちただ突進あるのみだった。
その為、北の地は、今なら一匹の蟲(むし)が攻め込んでも落とせるような状況下に置かれていた。
刀武は、全軍を賭(と)して戦に挑んでいるのだ。

刀武の軍勢は、およそ三万ほどであった。

第十話：武力と知力の、和解。

総大将を織嘉と定め、詠或が軍の参謀を努めた。
郭升が一万を率いて前線へ翔び、その他の兵には刀武の軍を挑発させた。
刀武の軍を翻弄しているその隙に斉誄が刀武の本陣を落とすという無謀かつ壮大な策を練った。
策は成功する。そう考えていた。

違ったのだ。
苦戦して、苦戦して、苦戦した。

まずは詠或の指示に従い郭升が前線へ出たが、刀武軍の精鋭には手の付けようが無かった。
このままだと織嘉の軍は劣勢から完全なる敗北へと陥れられてしまう。
そこで織嘉は軍配を振った。
斉誄の本陣制圧計画を潰し、斉誄に騎馬兵五百を統率させ前線へ送り出した。
兵糧も確実に減ってきている。
最後まで戦い抜くのは難しいだろう。
「私たちは負けてしまうのでしょうか…」
織嘉は焦っていた。
決して負けてはならない。
織嘉は立ち上がり、剣を手にした。

「私が出るとしましょう、城の守りを頼みますよ。我が家臣たち！」
城門を開け、戦場へと起ち上がった。
「織嘉将軍、お待ちくだされ！」
叫ぶ兵士たちの声は、織嘉の耳に届きはしなかった。
寧ろ今の織嘉には、戦う気しか無かった。

刀武には敵わない事を熟知している織嘉が。
一人の将軍が。
織嘉は駆けた、刀武のもとへ。

「刀武将軍！私と、一騎討ちを願います！西の地より織狗楓参ります！」
その声が響いた瞬間、刀武は振り返った。
「狗楓！決着は、武で争わなければいけないものなのか？今のお前は、真っ直ぐな眼をしているかもしれない。だが、今のお前の頭の中に、
和解したいという気持ちは…」
そこまで言い掛けて刀武は言葉を止めた。
「御免…俺は最低だ。事の始まりは俺が原因だったのにな。勝手なこと言ってすまないな」
剣を鞘に納めるとこう叫んだ。
刀武の口から予想もつかぬ言葉が放たれた。
戦場という舞台に起つ全ての戦士へ聴こえるように。
「我等刀岱夷軍は、これより狗楓の軍へ下る！異論は無いな！？」
場が粛清された。

異論のある者は、織嘉ただひとりだった。

「岱夷殿が私に下(くだ)る理由が私には理解できません。私が、岱夷殿の下で戦います。貴方(あなた)の戦い方をもっと知りたい、学びたい。私の方こそ自重が出来ず、深く反省しております」

終：治乱興亡、そして天下は光風霽月也。

武力と知力。
ふたりの将軍は和解した。
戦は終わりを告げ、互いが互いの勝利を掴んだ。
最後に笑ったのは――――。
全員だった。

「このまま、次の敵拠点（てききょてん）を制圧に行くか？」
詠或が郭升に問いかけた。
「何を言ってるんだ、忠葎」
郭升が言った。
「敵なんてもう居ないよ。居るのは味方だけだよ」
斉誄の髪が、風になびく。

北の地より赤髪の民、刀武　岱夷。
我こそが、最強の武力なり。

東の地より、碧眼の民。詠或　忠葎。
我こそが、最強の軍師なり。

南の地より、黄金の首飾りを身に付けた民。斉誄。
我こそが、最強の姫武者なり。

西の地より、緑色の鎧を纏った民。織嘉　狗楓。
我こそが、最強の知力なり。

南西の地より、白き心を抱く民。郭升　雛覇。
我こそが、最強の武器なり。

北東の地より、黒き気迫と怨念を漂わせる民。抵桧。
我こそが、最強の敗北者なり。

勝利。

この大陸は、束の間の泰平に包まれていた。
分裂しては、戦が起こる。
勝者が居て、敗者が居る。
――――――。

勝者が居て、勝者が居る。
天下は、ひとつとなった。
この天下の下(もと)、初雷(はつらい)が過ぎ去りて。
治乱興亡(ちらんこうぼう)の世は、今まさに。

光風霽月(こうふうせいげつ)なり也。

終：治乱興亡、そして天下は光風霽月也。（後書き）

本編はこれにて完結ですが、別伝をゆっくり書いていく予定です。
ありがとうございました。
もし暇があれば、ふがいないものですが私の出来次第別伝の方も拝読ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2478h/

治乱興亡、そして天下は光風霽月也。

2010年11月6日02時47分発行